

ASAMURA ISEKI

浅 村 遺 跡

—中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

1999.8

高 知 県 教 育 委 員 会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

ASAMURA ISEKI

浅 村 遺 跡

—中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

1999.8

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高知県西南部は幡多地域とよばれ、県内でも高知平野に次ぐ発掘件数の多さを誇る地域です。特に四万十川の支流である中筋川流域では河川改修・道路建設に伴い発掘調査が継続的に実施されています。

今回、報告いたします浅村遺跡も高規格道路中村宿毛道路建設に伴う発掘調査で得た資料で、小規模ではありますが弥生時代後期終末の祭祀跡であると考えています。中筋川の4kmほど下流には古墳時代の河川祭祀跡群である具同中山遺跡群が存在していることから、浅村遺跡も具同中山遺跡群と同様、中筋川水系での一連の祭祀跡と位置付けることができ、当時の精神活動の一端を知るうえで重要な遺跡です。この報告書が埋蔵文化財の保護及び考古学研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しましてご協力・ご理解をいただきました建設省四国地方建設局の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、発掘作業に従事してくださった作業員の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成11年8月

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 河崎 正幸

例 言

1. 本書は、高規格道路中村宿毛道路建設に伴う浅村遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 浅村遺跡は、高知県中村市森沢に所在する。
 3. 調査は、建設省四国地方建設局の委託を高知県教育委員会が受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
 4. 調査期間
試掘調査 平成8年12月16日～平成9年2月4日
本調査 平成10年7月22日～平成10年9月7日
 5. 調査面積
試掘調査 800m² 本調査 780m²
 6. 調査体制
 - (1) 調査員
松田直則 ((財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 第五係長) の指導のもと以下の体制で調査を担当した。
試掘調査 竹村三菜 ((財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査員)
武吉眞裕 (同 非常勤)
岡村朋美 (同 技術補助員)
本調査 久家隆芳 ((財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査員)
岡村朋美 (同 技術補助員)
野町和人 (同 測量補助員)
 - (2) 総務担当
津野洲夫 ((財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター次長兼総務課長)
大原裕幸 (同 主幹)
山崎詠子 (同 臨時職員)
 7. 本書の執筆・写真撮影・編集等は久家が行った。
 8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたり、松田直則氏・廣田佳久氏・前田光雄氏・藤方正治氏・山田和吉氏 ((財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター) をはじめ(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸学兄に御指導・御教示を賜った。記して感謝する次第である。
 9. (1) 発掘現場作業員
猛暑を厭わず作業に従事して下さった皆様に対し、記して感謝の意を表したい。
岡崎眞紀 岡本定美 岡本寿美子 岡本寅美 岡本弘美 岡本芳子 沖 和子
長崎竹美 中山昭子 布 陽子 野並 盧 浜田昌一 平地五月 松本菊美
 - (2) 整理作業員
橋田美紀 飯田 縁 岡本智子 黒岩佳子 澤本友子 益井和子 宮地佐枝
8. 出土遺物については試掘調査時のものは「96-43NA」と注記し、本調査時のものは「98-

15NA」と注記し、関連図面・写真等とともに(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

巻頭カラー

序・例言

目次・挿図目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

- 1. 地理的環境…………… 1
- 2. 歴史的環境…………… 1

第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法

- 1. 調査に至る経過…………… 6
- 2. 調査の方法…………… 6
- 3. 基本層序…………… 6

第Ⅲ章 調査成果

- 1. 検出遺構…………… 10
- 2. 出土遺物…………… 13

第Ⅳ章 まとめ

- 浅村遺跡検出焼土跡群の性格について…………… 14

写真図版

報告書抄録

挿図目次

Fig. 1	浅村遺跡周辺の遺跡	3~4
Fig. 2	中村市位置図	6
Fig. 3	試掘トレンチ位置図	7
Fig. 4	本調査区位置図	8
Fig. 5	本調査区グリッド設定図	8
Fig. 6	北壁実測図（基本層序）	9
Fig. 7	試掘調査 焼土跡群・遺物出土地点平面分布図	10
Fig. 8	本調査 焼土跡群・遺物出土地点平面分布図・垂直分布図	11
Fig. 9	焼土5・遺物（1・6）出土状況平面図	12
Fig.10	焼土跡群・炭化物集中地点平面図	12
Fig.11	出土遺物実測図	13
Fig.12	弥生土器甕使用痕跡模式図	14
Fig.13	SF12遺物出土状況図	17
Fig.14	SF14遺物出土状況図	17
Fig.15	SF21遺物出土状況図	17
Fig.16	S×3遺物出土状況図	18
Fig.17	焼土跡群	18

写真目次

巻頭カラー

PL.1	調査区近景 北壁堆積状況
PL.2	遺物出土状況 完掘状況
PL.3	出土遺物

第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

中村市は高知県の西部に位置する。人口約35,000人¹であり、県西部では宿毛市とともに中心的な役割を果たしている。総面積は384.50km²であり、そのうち80.6%³が森林である。中村市を流れる四万十川は高知県と愛媛県の県境にそびえる鳥形山と不入山に発し、松葉川となり仁井田台地で流れを西に変える。中村市に入り中筋川と後川が合流し、太平洋に注ぐ。四国では吉野川に次ぐ大河であり、日本最後の清流としても有名である。

中筋川は宿毛市山田に発する山田川・横瀬川と、三原村に発する平田川が有岡で合流し、向きを東に変え間川・森沢川等を合流しながら四万十川に合流し、太平洋に注ぐ。四万十川へは現在実崎で合流しているが以前は坂本で合流していた。上流と下流の高低差がほとんどなく、河床は海拔0m以下の部分もあり洪水の原因となってきた。明治末まで舟による運搬が行われており、物資の流通に一役買ってきた。中筋川の沖積作用で形成された中筋平野は中村平野の大部分を占めている。平野は中村市の総面積のうちの森林が占める割合が示すように少なく、河川流域の極く限られた範囲にのみ存在する。このことは幡多郡全域についても言えることである。

2. 歴史的環境

遺跡の分布が濃密であり、発掘調査が多く実施されている中筋川流域を中心に歴史的環境を見ていくことにする。

縄文時代 国見遺跡では中期・後期の土器が出土している。中期では舟元式が、後期では平城式が出土している⁴。船戸遺跡からは片粕式・北久根山式系統の土器群と西平式・伊吹町式を中心とした後期土器群がそれぞれ出土している。また、後期後葉のドングリ貯蔵穴を検出した⁵。

弥生時代 弥生文化成立期、幡多地方は遠賀川系土器に縄文晩期系の土器が共伴する「二重構造」地域として把握されており、高知平野とは違った展開をみせる。入田遺跡では前期、具同中山遺跡群からは前期中～末、西ノ谷遺跡では前期末の土器群がそれぞれ出土している。また、国見遺跡では前期中葉の竪穴住居跡1棟を検出した⁶。

中筋川流域では銅矛が2本出土している。1本は石丸遺跡⁷出土であり、もう1本は伝山路遺跡出土となっているものである。両方とも詳細は不明である⁸。

古墳時代 前期古墳が宿毛市平田に築かれる。高岡山古墳群に続き県内唯一の前方後円墳である曾我山古墳が築かれる。高岡山1号墳から筒形銅器・青銅製小棒が出土し、高岡山2号墳からは内行花文鏡が1面出土している⁹。中筋川流域の具同中山遺跡群では弥生時代後期終末から古墳時代中期にかけての水辺の祭祀跡が多く検出されているが最盛期を迎えるのは5世紀後半～6世紀初頭である。その後、6世紀後半には祭祀の場所が後川流域の古津賀遺跡に移る。船戸遺跡では前期の小規模な祭祀跡¹⁰、国見遺跡では土坑から白玉が出土している¹¹等散発的ではあるが小規模な祭祀跡が検出されている。

一方、平田での前期古墳築造以後、途絶えていた古墳の築造が後期に至り再開される。古津賀古墳・田ノ口古墳等数基の古墳が築かれる。

古代 風指遺跡から緑釉陶器がまとまって出土しており祭祀跡と考えられている。古代に至っても具同中山遺跡群周辺は祭祀の場としての意味合いを色濃く残す¹²。船戸遺跡からは8世紀～9世紀にかけての遺物がまとまって出土した。遺構では自然流路跡以外は検出されなかったが掘立柱建物群が存在していたと推定されている¹³。

中・近世 考古学的に集落として把握できるようになるのは古代末からである。特に発掘調査により比較的わかりつつあるのは12～13世紀代にかけてと15～16世紀代についてである。

12～13世紀代にかけて、具同中山遺跡群は貿易陶磁器・瓦器を含む出土遺物量および掘立柱建物群も最も多く最盛期を迎える。「金剛福寺文書」によれば1237年には九条氏の荘園として幡多庄が成立しており、その後1250年に九条氏から一条氏に譲渡されたことが記されている。1275年以前から古津賀木ノ津に「舟所識」の役職が置かれ、一条氏の専用の河津として機能していたようである。具同中山遺跡群は中筋川中・上流域に存在する集落との「結節点」に位置し発展したと考えられるが、中世寺院である香山寺の存在も大きな影響があったと考えられる¹⁴。

空白の14世紀代を経て、再び遺物が出土し始めるのは15～16世紀代になってからである。船戸遺跡では掘立柱建物が10棟検出されている。また、出土遺物でも呪符、石製の碇が出土し船戸遺跡の性格を示唆する。また、遺跡名が示すよう小字を「船戸」という。出土遺物・地形等から川舟の停泊地としての役割があった場所と考えられている¹⁵。16世紀末の長宗我部地検帳と発掘調査で得られた考古学的資料を組み合わせ江ノ村の復元が試みられ、城・神社を含む集落の構造が明らかにされている¹⁶。

また、現在の中村市街地である小姓町地区において考古学的な調査が実施された。中村市街地では初めてのことであり画期的な調査である。中村市街地は一条教房が15世紀末に幡多下向し整備したといわれてきた。調査では17世紀の遺物に混じり14世紀代の遺物が出土し、一条氏が幡多に下向する以前から集落が形成されていたことがわかる¹⁷。中村城¹⁸・扇城¹⁹・栗本城²⁰・ハナノシロ城²¹等の城跡が築かれるのもこの時期である。

¹ 中村市役所のご教示による。

² 1に同じ。

³ 1に同じ。

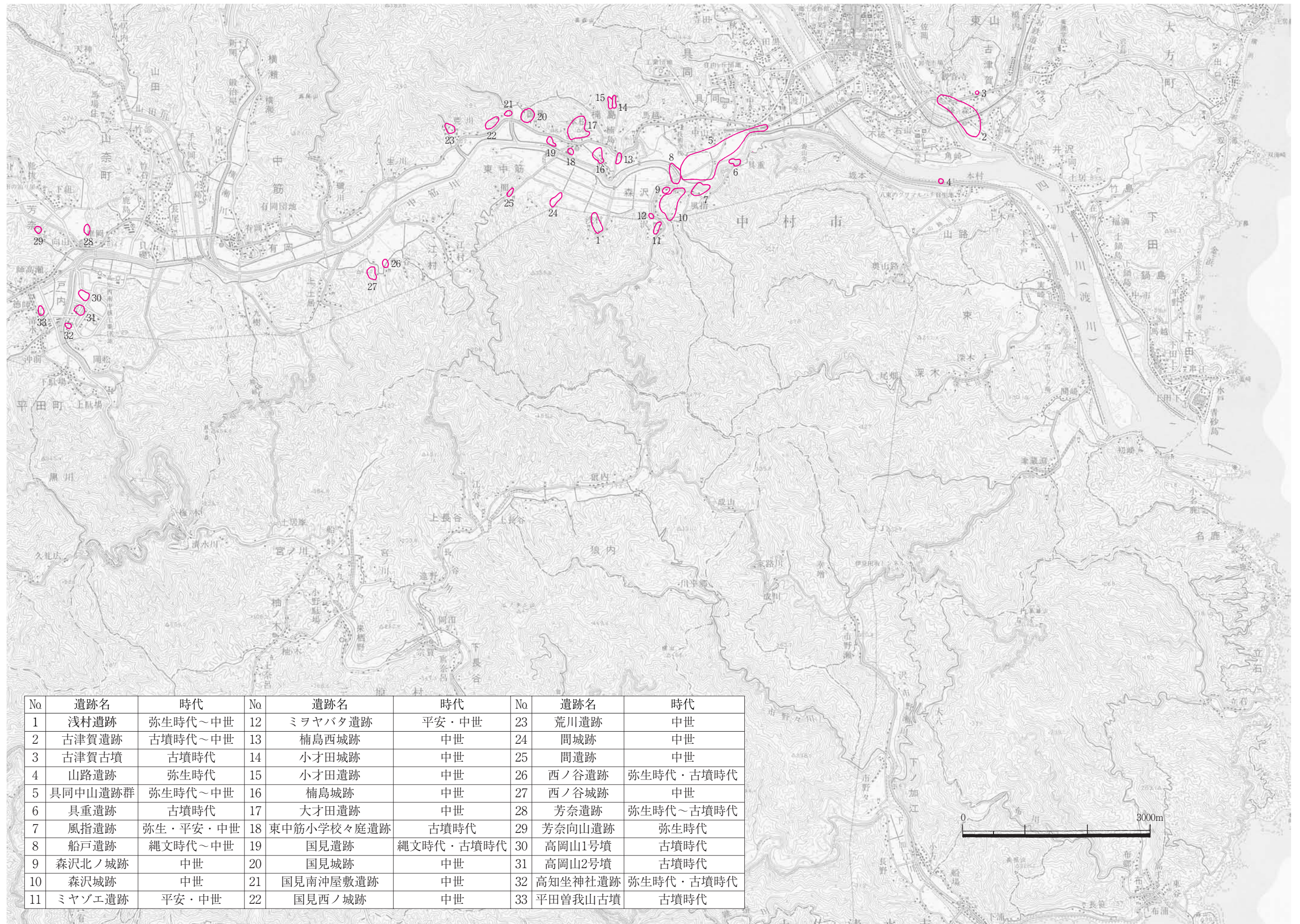
⁴ 曾我貴行 国見遺跡 中村市教育委員会 1994.3

⁵ 出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・竹村三菜・武吉眞裕 船戸遺跡 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996.3

⁶ 4に同じ

⁷ 現、具同中山遺跡群

⁸ 中村市史 中村市教育委員会 1969



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	浅村遺跡	弥生時代～中世	12	ミラヤバタ遺跡	平安・中世	23	荒川遺跡	中世
2	古津賀遺跡	古墳時代～中世	13	楠島西城跡	中世	24	間城跡	中世
3	古津賀古墳	古墳時代	14	小才田城跡	中世	25	間遺跡	中世
4	山路遺跡	弥生時代	15	小才田遺跡	中世	26	西ノ谷遺跡	弥生時代・古墳時代
5	具同中山遺跡群	弥生時代～中世	16	楠島城跡	中世	27	西ノ谷城跡	中世
6	具重遺跡	古墳時代	17	大才田遺跡	中世	28	芳奈遺跡	弥生時代～古墳時代
7	風指遺跡	弥生・平安・中世	18	東中筋小学校々庭遺跡	古墳時代	29	芳奈向山遺跡	弥生時代
8	船戸遺跡	縄文時代～中世	19	国見遺跡	縄文時代・古墳時代	30	高岡山1号墳	古墳時代
9	森沢北ノ城跡	中世	20	国見城跡	中世	31	高岡山2号墳	古墳時代
10	森沢城跡	中世	21	国見南小屋敷遺跡	中世	32	高知坐神社遺跡	弥生時代・古墳時代
11	ミヤゾエ遺跡	平安・中世	22	国見西ノ城跡	中世	33	平田曾我山古墳	古墳時代

Fig.1 浅村遺跡周辺の遺跡

- ⁹ 山本哲也 高岡山古墳群発掘調査報告書 高知県教育委員会 1985
- ¹⁰ 5に同じ。
- ¹¹ 4に同じ。
- ¹² 松田直則・出原恵三・廣田佳久 後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡 高知県教育委員会 1989.3
- ¹³ 5に同じ
- ¹⁴ 松田直則 「四万十川流域の中世河津」 『中世都市研究3』 新人物往来社 1996.9
松田直則 「四万十川流域の遺跡」 『中近世土器の基礎研究XI』 1996.12
- ¹⁵ 5に同じ。
- ¹⁶ 14に同じ。
- ¹⁷ 竹村三菜 他 土佐中村一条氏遺跡確認調査報告書 中村市教育委員会 1997.3
- ¹⁸ 松田直則 他 中村城跡 中村市教育委員会 1985
- ¹⁹ 森田尚宏・吉成承三 扇城跡 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- ²⁰ 木村剛朗 栗本城跡 中村市教育委員会 1985
- ²¹ 松田直則・曾我貴行・竹村三菜 中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ ハナシロ城跡 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993

第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経過

国道56号線は太平洋・宇和海・瀬戸内海沿岸の主要都市を經由し高知市と松山市を結ぶ主要幹線道路である。一般国道56号中村宿毛道路は高規格幹線道路であり、将来的には四国横断自動車道に接続する。工事予定地内の中筋平野およびその山裾は多くの遺跡が存在する地域として周知されている地域であるため、工事予定地内については埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査を実施することとなった。10m×10mのトレンチを8箇所設定し、試掘調査を行った。そのうちの一つであるFトレンチから焼土跡および弥生時代終末期の土器集中地点を確認した。そこで、建設省四国建設局中村工事事務所・高知県・高知県教育委員会が協議した結果、遺物が集中する箇所について発掘調査を実施することで合意した。平成10年4月1日付けで委託契約を締結し、発掘調査は高知県教育委員会が受託し、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが実施した。

2. 調査の方法 (Fig. 3～5)

試掘調査の結果をもとに、盛土・表土及び無遺物層を重機で掘削した。遺物包含層については人力により掘削した。

遺物の取り上げについては基本的にはトータルステーションを用いた。必要に応じ、写真撮影及び公共座標をもとに平面実測を行った。

3. 基本層序 (Fig. 6)

調査区北壁で基本層序の観察を行った。

各層はほぼ水平に堆積している。

5層と6層及び6層と7層と8層の境は不明瞭となり分層が不可能となる部分がある。

8層は遺物包含層である。

9層は自然流路状あるいは落ち込み状の地形を呈していたと考えられるが、平面プランを明確にするには至らなかった。なお、9層には遺物は含まれていなかった。

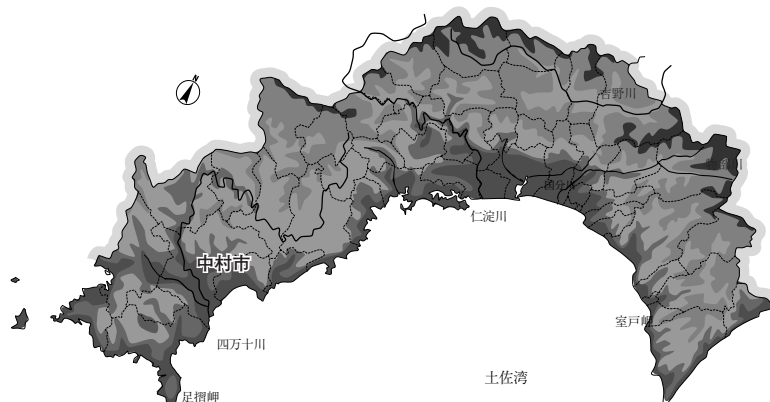


Fig. 2 中村市位置図

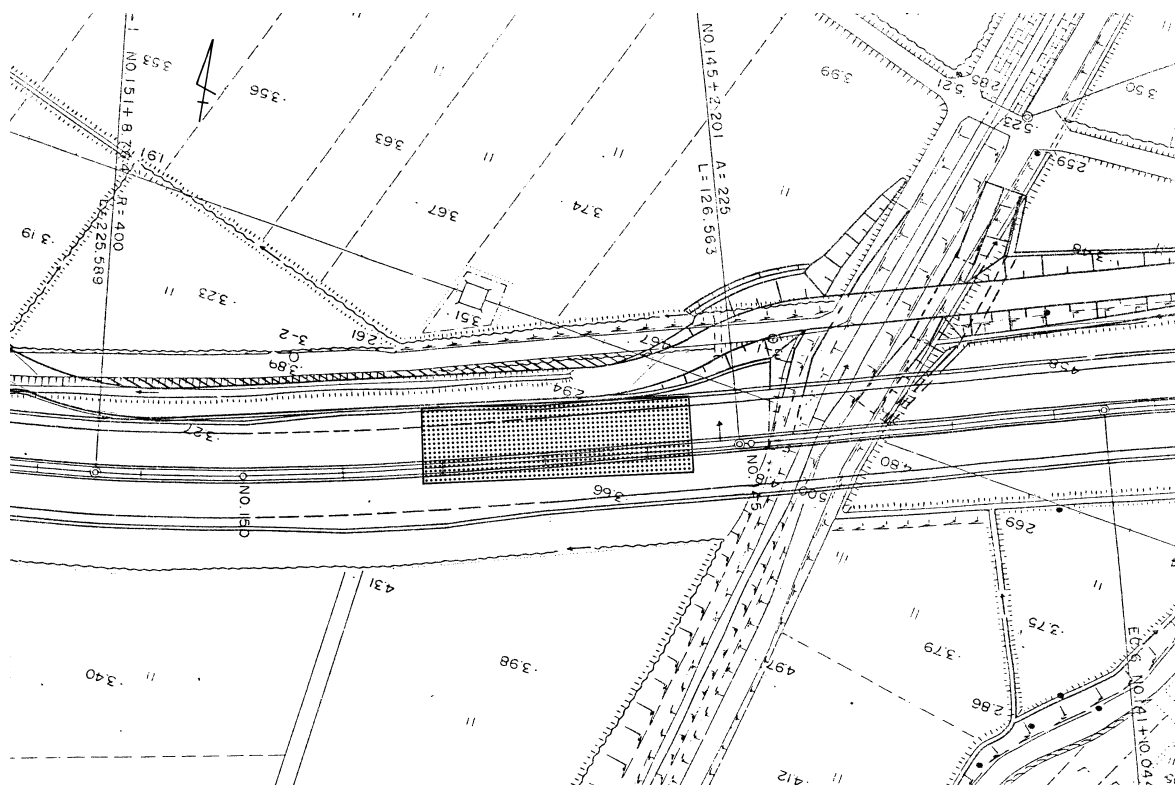


Fig.4 本調査区位置図

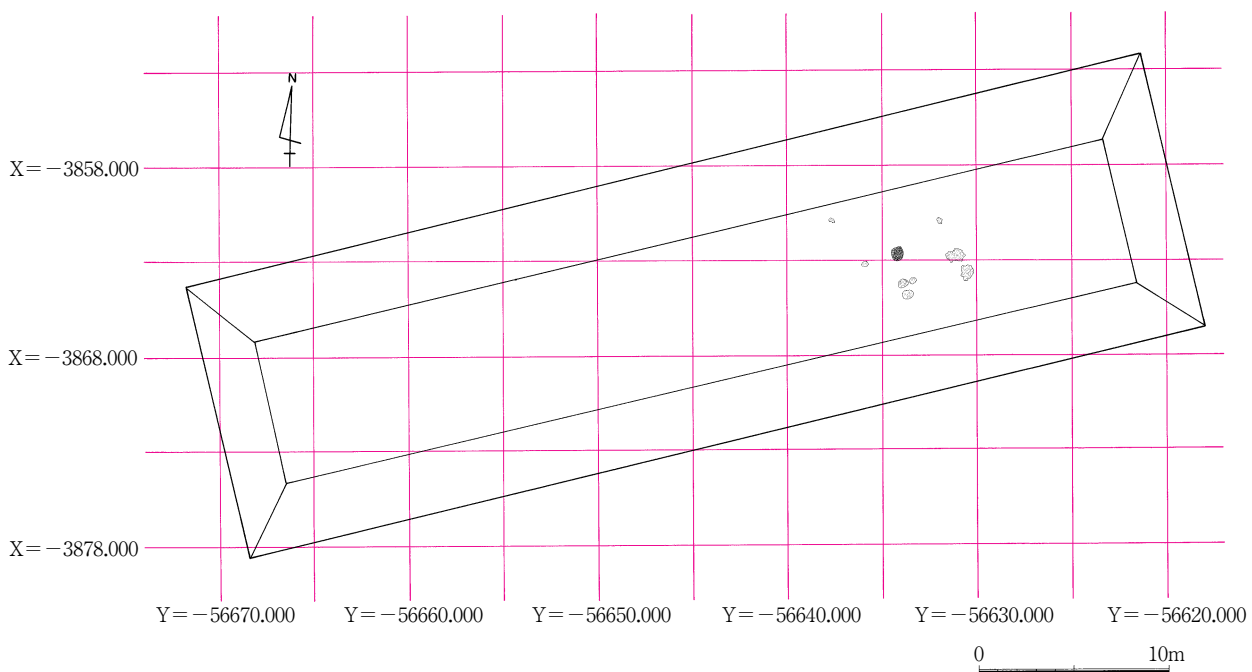


Fig.5 本調査区グリッド設定図



- 1 攪乱 [盛土]
- 2 5Y6/2 灰オリーブ色粘土 [旧表土]
- 3 5Y6/2 灰オリーブ色粘土
- 4 10YR6/4 にぶい黄橙色粘土
- 5 7.5Y5/1 灰色粘土
- 6 10GY6/1 緑灰色粘土
- 7 10GY6/1 緑灰色粘土
- 8 10GY6/1 緑灰色粘土 [遺物包含層]
- 9 N6/0 灰色粘土 [自然流路状遺構埋土]

Fig. 6 北壁実測図 (基本層序)

第三章 調査成果

本調査では試掘調査Fトレンチ同様、焼土跡群を検出した。これらの焼土跡群は試掘調査で検出された焼土跡群と近接しており一連のものと考えられる。以下では試掘調査の成果と本調査での成果を個別に述べた後全体のことに触れていくことにする。

1. 検出遺構 (Fig. 7~10)

試掘調査Fトレンチ (Fig. 7) では炭化物集中地点1箇所と焼土跡を4箇所検出した。炭化物集中地点は長径0.6m、短径0.5mの平面楕円形を呈する。焼土跡群は平面楕円形で直径0.3~0.5mの規模である。焼土跡4は検出面から約5cmほど被熱により変色していた。

本調査 (Fig. 8・9) では焼土跡を4箇所検出した。焼土跡の規模は長径0.3~1mであり、平面形はすべてアメーバー状を呈する。焼土跡5周辺で1・6が横転した状態で出土した。1は口縁部を北東方向に向け、6は口縁部を南東方向に向ける。

試掘調査Fトレンチ検出焼土群と本調査検出焼土群を接合したものがFig. 10である。ほぼ同一の高さから8箇所の焼土跡群および一箇所の炭化物集中地点を検出した。炭化物集中地点を中心に焼土

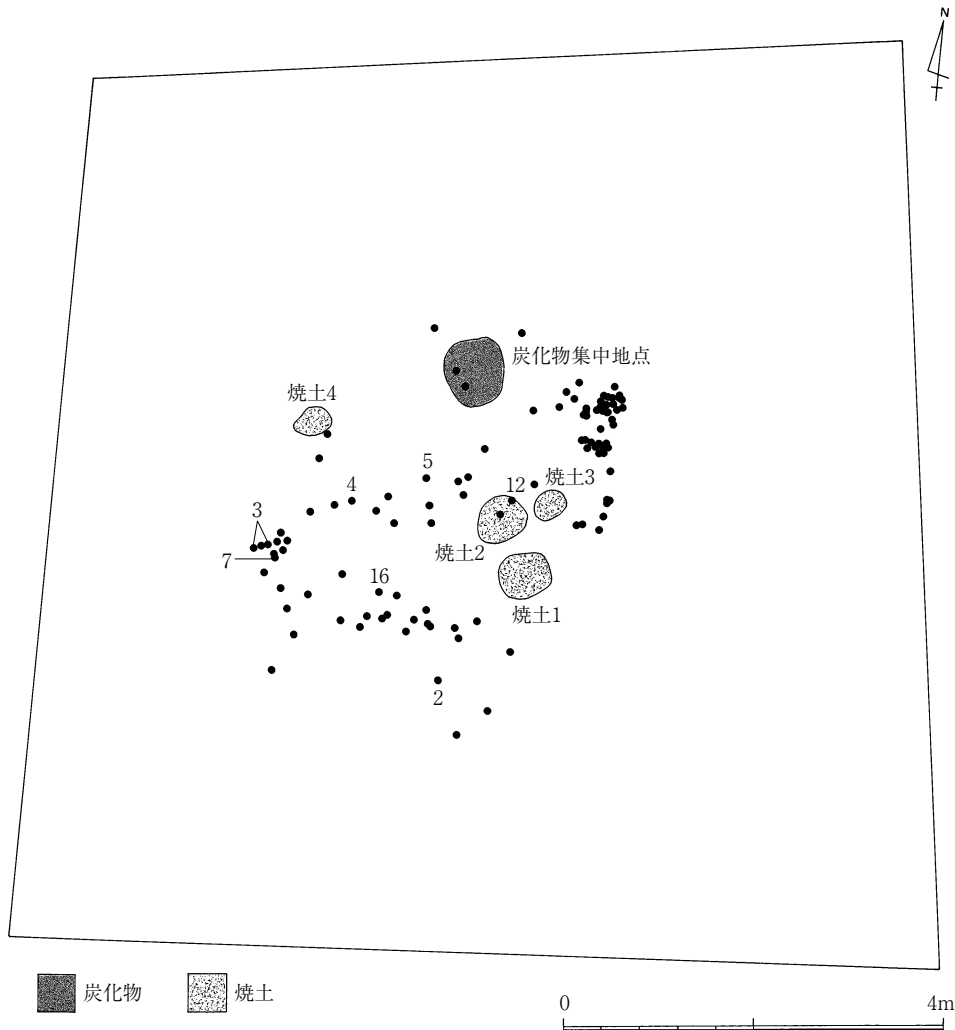


Fig. 7 試掘調査 焼土跡群・遺物出土地点平面分布図

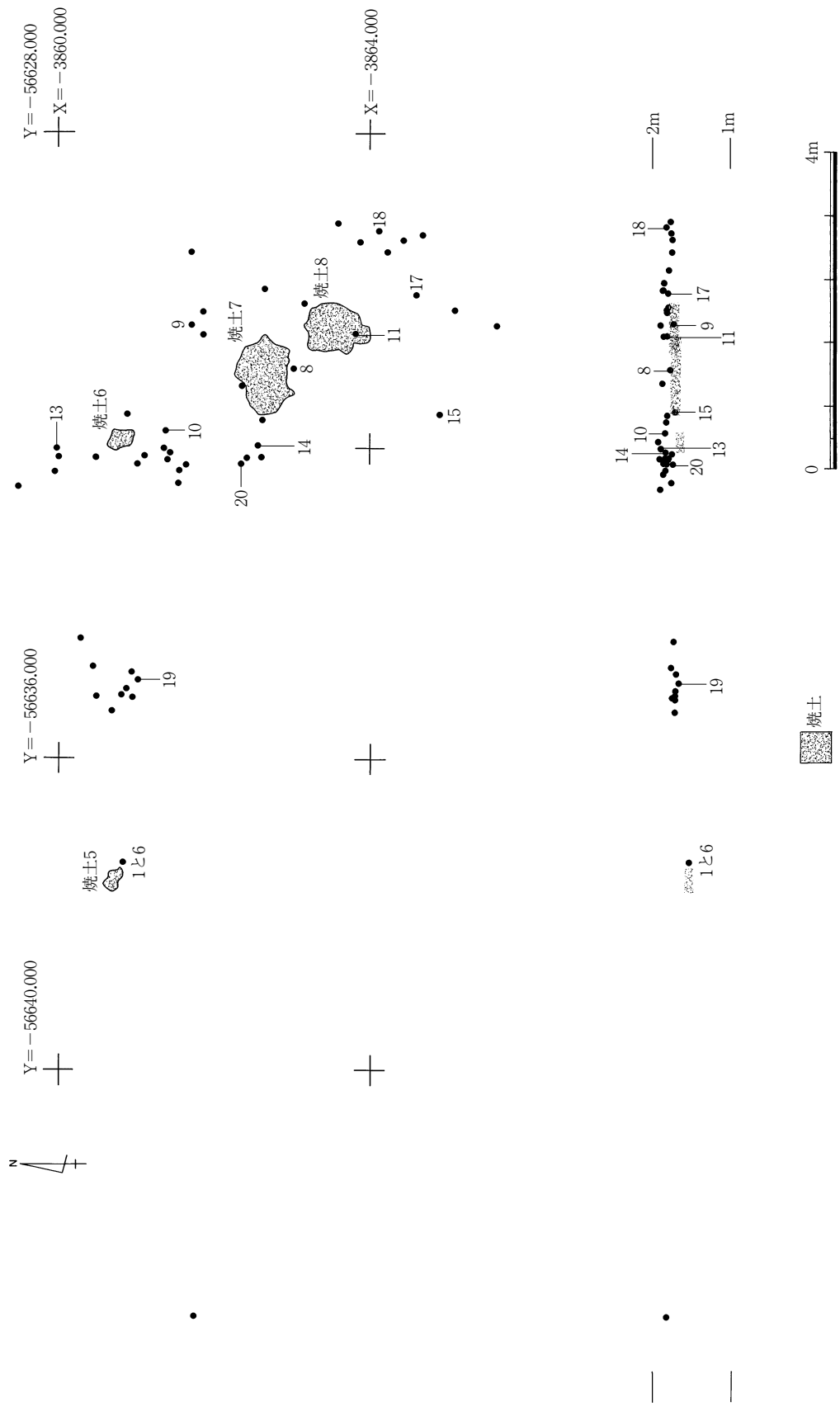


Fig. 8 本調査 焼土跡群・遺物出土地点平面分布図・垂直分布図

跡群が円形から楕円形を描くように点在する。焼土跡群は1m弱の規模のものから0.3m規模のものまでである。焼土跡群の分布範囲と出土遺物の分布範囲はほぼ重なる。

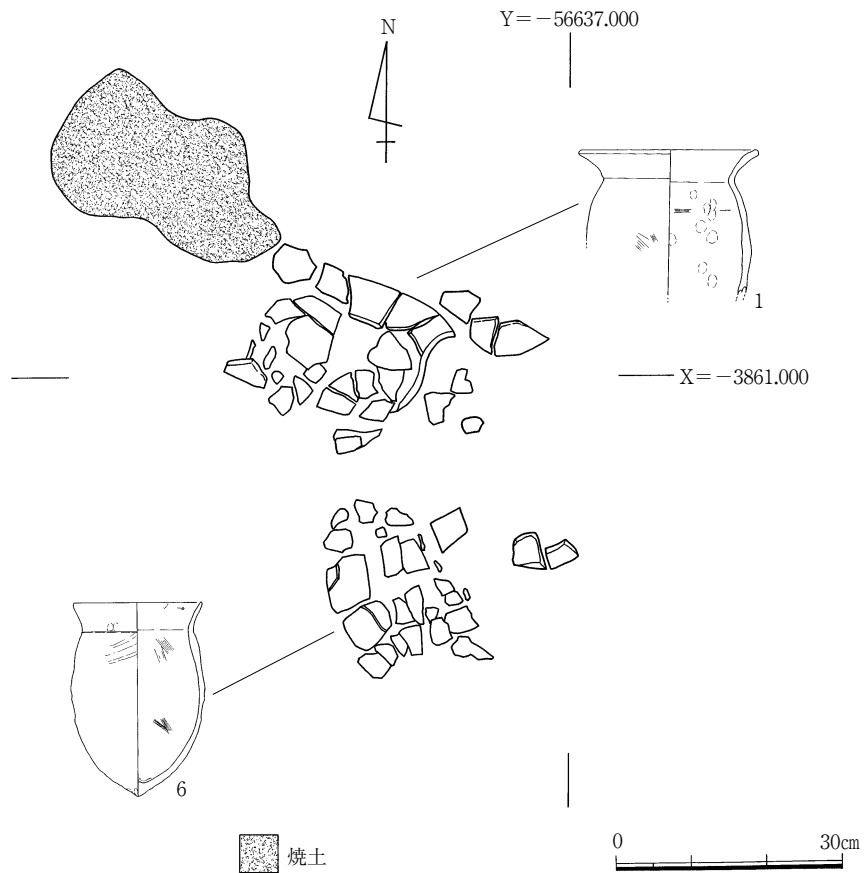


Fig. 9 焼土5・遺物（1・6）出土状況平面図

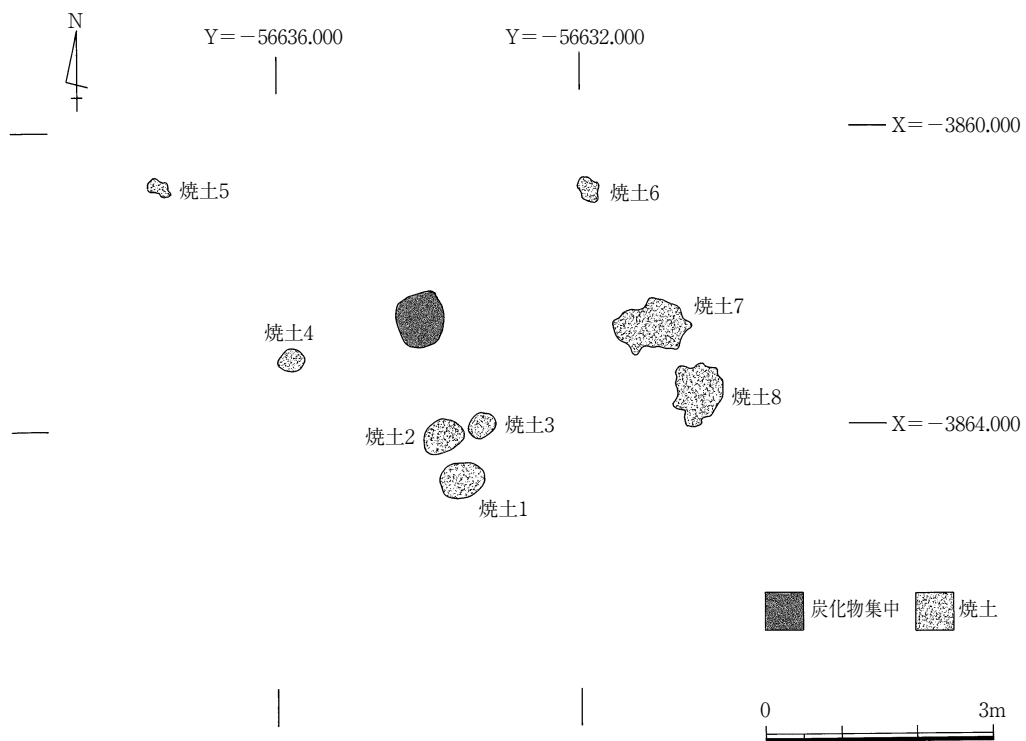


Fig.10 焼土跡群・炭化物集中地点平面図

2. 出土遺物

1は弥生土器の甕である。体部径は小さく肩を呈する。口縁部は比較的大きく外反する。口縁端部は弱いながら面をなす。内面には粘土帯接合時の指頭圧痕が水平に巡る。外面肩部付近に煤が帯状に付着する。体部外面にはハケ調整を施す。2は弥生土器の甕である。口縁部は大きく外反する。肩部内面には口縁部を体部に接合する折りのナデが残る。外面にはハケ調整を施す。5は弥生土器の甕である。口縁部は短く緩やかに外反する。口縁部まで叩きにより成形する。叩き目は水平に近い右上がりりを基調とする。体部内面にはハケ調整を施す。外面には煤が幅約5cmの帯状に付着する。煤より下は被熱により赤橙色を呈する。内面には炭化物の付着は見られない。6は弥生土器の甕である。尖底を呈する。口縁部の外反度は弱い。7は弥生土器の甕である。口縁部は緩やかに短く外反する。外面には叩き目が残存する。内面はハケ調整である。外面には煤が付着する。8は焼け石である。激しい火を受け赤褐色を呈する。一面のみ火の受け具合が弱かったようでややくすんだ褐色を呈する。支脚として利用されていた可能性がある。9~20は底部である。底径は概ね5cm前後の平底である。21は土師質土器の杯である。混入と考えられる。

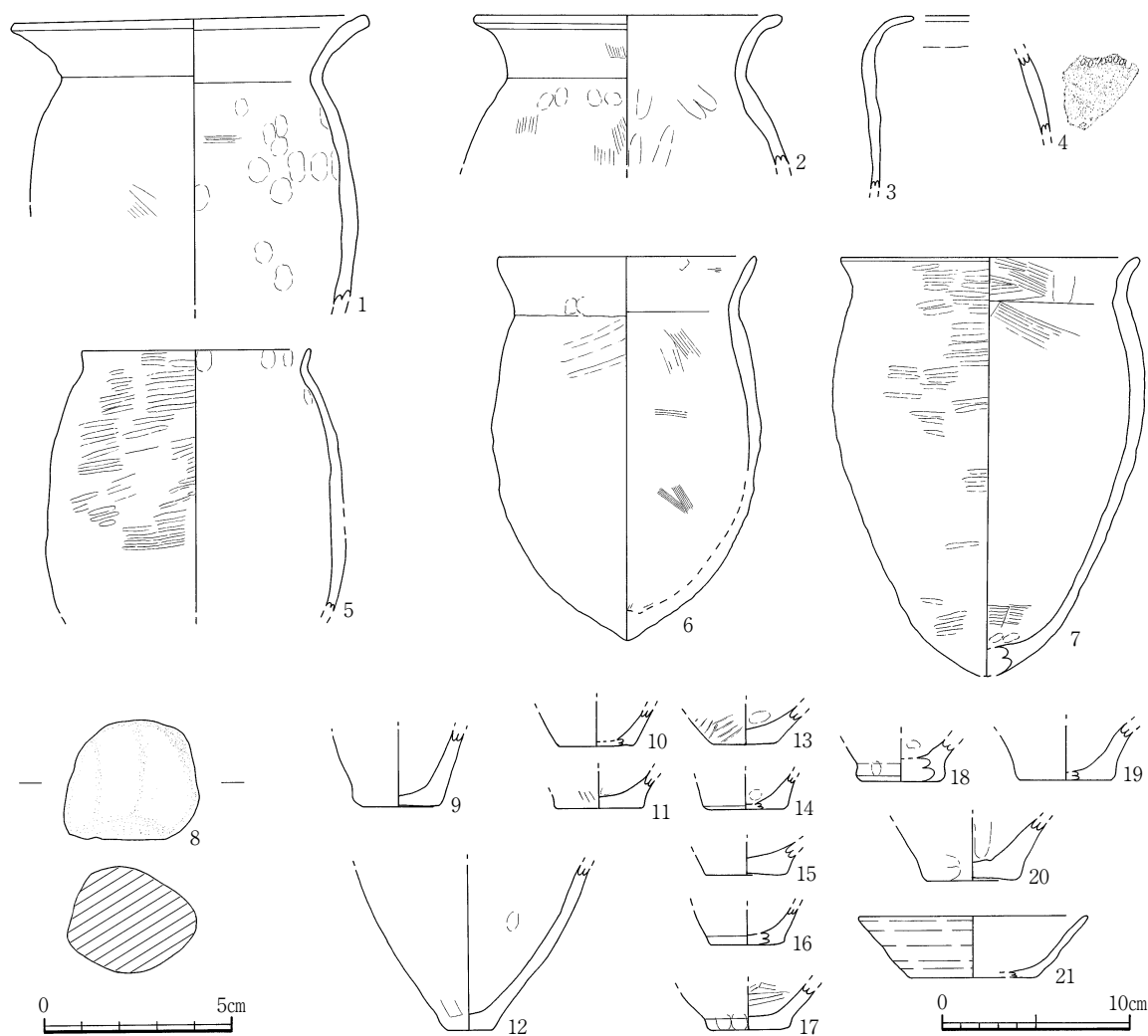


Fig.11 出土遺物実測図

第Ⅳ章 まとめ

浅村遺跡検出焼土跡群の性格について

1. はじめに

今回検出された焼土跡群および土器群は遺物の出土範囲が極めて限定されること、器種組成の大半を甕が占めること、約4km下流の具同中山遺跡群の存在等を考慮に入れると、何らかの祭祀に使用されたものである可能性が高い。浅村遺跡は、具同中山遺跡群に代表される中筋川流域で検出されている水辺の祭祀跡の一つであり、それらと一連のものであると位置付けることができる。では、浅村遺跡ではいかなる祭祀が行われたのであろうか？ 浅村遺跡を特徴付ける焼土跡群と土器群の出土状況・甕の表面および内面観察から検討していく。また、具同中山遺跡群においても焼土跡を含む祭祀跡が検出されており、それらについても合わせて紹介することにする。

2. 焼土跡の性格について

ここでは土器表面の観察結果から浅村遺跡での煮沸状況を検討し、焼土跡群の性格について明らかにしてみる。比較的外面の様子がわかるFig12-1・5・6・7を中心に使用状況を復元する。1は下半部は欠損しているが、上半部は残りがよい。外面は肩部以下に煤が付着する。一部は上方へ盛り上がるように煤が付着しており、盛り上がる部分については対応する口縁部にも煤が付着する。内面にはおこげ¹の付着は認められない。5は外面に濃淡はあるがベルト状に煤が付着する。欠損があり全周にわたり煤が付着するかは不明である。内面におこげは付着しない。6は口縁部内外面、体部上半に幅約5cmのベルト状に煤が付着する。体部上半の煤付着部分については上端の幅約1cmはやや濃く煤が付着するがそれ以下は被熱変色部と煤付着部が混じる。また、胴部下半は被熱変色部分であり、底部も被熱痕跡があることから尖底ではあるが、底部の一部を土中に埋めることなく使用していたと考えられる。内面は底部周辺におこげがうっすらと付着する部分がある。7は外面では肩部に煤の付着が見られる。一部が欠損しているため、

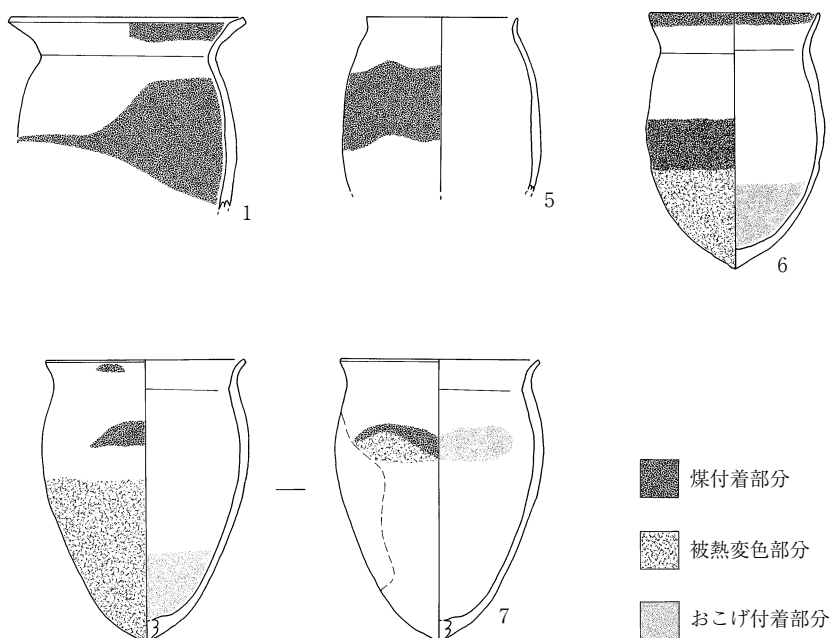


Fig.12 弥生土器甕使用痕跡模式図

全周にわたり煤がベルト状に付着しているかは断言できないが、残存している箇所についてはベルト状に煤が付着している状況が観察できる。煤付着部分以下では底面を含めて被熱変色が認められる。内面底部周辺には全体的にうっすらとおこげが付着する。また、肩部の煤付着部分に重なるようにピンク色に発色している部分があり、被熱痕跡が見られる。それに対応する内面にはおこげの付着が認められる。これらから正位の状態でも使用され、横転した状態でも火を受けたと考えられる。

出土した甕で全体を復元できる個体は少ないが、上述した観察結果から煮沸された状況を検討すると、底部から胴部下半の外面は被熱による変色が認められるという共通点を見出すことができる。このことは底部片の観察結果からも言えることであり、底部は地面から離れて火を受けていたと考えられる。また、煤は外面全面に激しく付着する個体はない。煤の付着が比較的薄いのは火力が弱かったからであろうか。甕の表面観察からも炉的な施設による煮沸が想定でき、検出された焼土跡群とも矛盾せず、遺物の出土状況と考え合わせると検出された焼土跡群は甕を煮沸した痕跡であると考えられる。

3. 具同中山遺跡群検出の焼土跡

具同中山遺跡群では焼土跡を伴う土器の集中地点であるSXを1箇所、祭祀跡例は6箇所報告されている。

(1) SX3²

3.1m×6.0mの範囲に遺物が分布する。

時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期である。

(2) SF12³

約14m×約7mの広範囲に遺物が散在するが、遺物の出土量は他の祭祀跡に比較して少ない。遺物分布範囲の中央やや北寄りに焼土跡が1箇所存在する。時期は5世紀末～6世紀初頭に属する⁴。

(3) SF14⁵

約5.4m×約3.8mの範囲に遺物が分布する。SF12同様、遺物量は少ない。焼土跡は遺物分布範囲の南西隅に1箇所存在する。時期は5世紀末～6世紀初頭に属する。

(4) SF20⁶

約16m×約20mの範囲に遺物が集中する。祭祀跡としては明確には捉えることができず、遺物が広範囲に散在する。このSF20の南側に焼土跡が8箇所分布するようである。焼土跡群がSF20に確実に伴うかは不明である。時期は5世紀末～6世紀初頭に属する。

(5) SF21⁷

約20m×約16mの範囲に遺物が集中的に分布する。祭祀跡としては明確に捉えられることができない。時期は5世紀末～6世紀初頭に属する。

(6) 焼土跡群⁸

約20m×約45mの範囲で焼土跡群が検出されている。数面にわたり焼土跡群が検出されている。約30箇所の焼土跡が検出されている。縄文時代晩期の土器を伴うものを最古とし、古墳時代前期初頭の土器が伴う焼土跡まで、連綿と検出されている⁹。

時期的には縄文時代晩期に遡る焼土跡群があるが、祭祀関連とは考え難いので一応ここでは除外する。下限は5世紀末～6世紀初頭であり、6世紀前半以降は全く検出されていない。具同中山遺跡群に後続する古津賀遺跡¹⁰でも焼土跡を含む祭祀跡は検出されていない。遺物が比較的散漫として出土しており、遺物の集中具合では祭祀跡と明確にすることができないという点はそれぞれのものに共通して言えそうである。また、出土遺物も完形になるものが少ない。

4. まとめ

浅村遺跡検出の焼土跡群の性格について遺物の出土状況、甕の表面・内面の観察から検討を加えてきた結果、煮沸行為が行われたものと想定した。また、具同中山遺跡群で検出されている焼土跡を含む祭祀跡を合わせ検討した結果、広範囲に遺物が散在すること等の特徴を抽出することができ、焼土跡の有無が祭祀跡を分類するうえで重要な基準となる可能性がある。時期的には上限を確定することができないが下限は5世紀末から6世紀初頭であることが明かとなった。

以上、具同中山遺跡群を含め、焼土跡を含む祭祀跡について若干の検討を加えてきた。焼土跡群の性格についてはすべてのものが煮沸に使用されたものとは言い難く、個々に検討を加えていくべきであろう。

¹ 被熱により土器表面が変色している部分については被熱変色部分とした。以下では深澤氏の定義に準じ、外面で黒色化している部分については煤付着部分とし、内面の黒色化部分についてはおこげとした。

深澤芳樹 「おこげのあと」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論集文化財論叢Ⅱ』 1995

² 出原恵三・廣田佳久・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』 高知県教育委員会・高知県埋蔵文化財センター 1988

³ 前田光雄・松田直則・廣田佳久他『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 第1分冊 高知県教育委員会・高知県埋蔵文化財センター 1992

⁴ 時期については須恵器が伴うSF12・SF14・SF20・SF21は『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』の第4章総括で廣田佳久氏により述べられている須恵器による編年を用いた。また、廣田氏には祭祀跡出土の須恵器について特に年代観を中心に御教示を得た。

⁵ 3に同じ。

⁶ 3に同じ。

⁷ 3に同じ。

⁸ 前田光雄・松田直則・廣田佳久他『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 第2分冊 高知県教育委員会・高知県埋蔵文化財センター 1992

⁹ 調査者の前田光雄氏に各時期すべてを祭祀に関連させて捉えてはいないという御教示を得た。

¹⁰ 2に同じ。

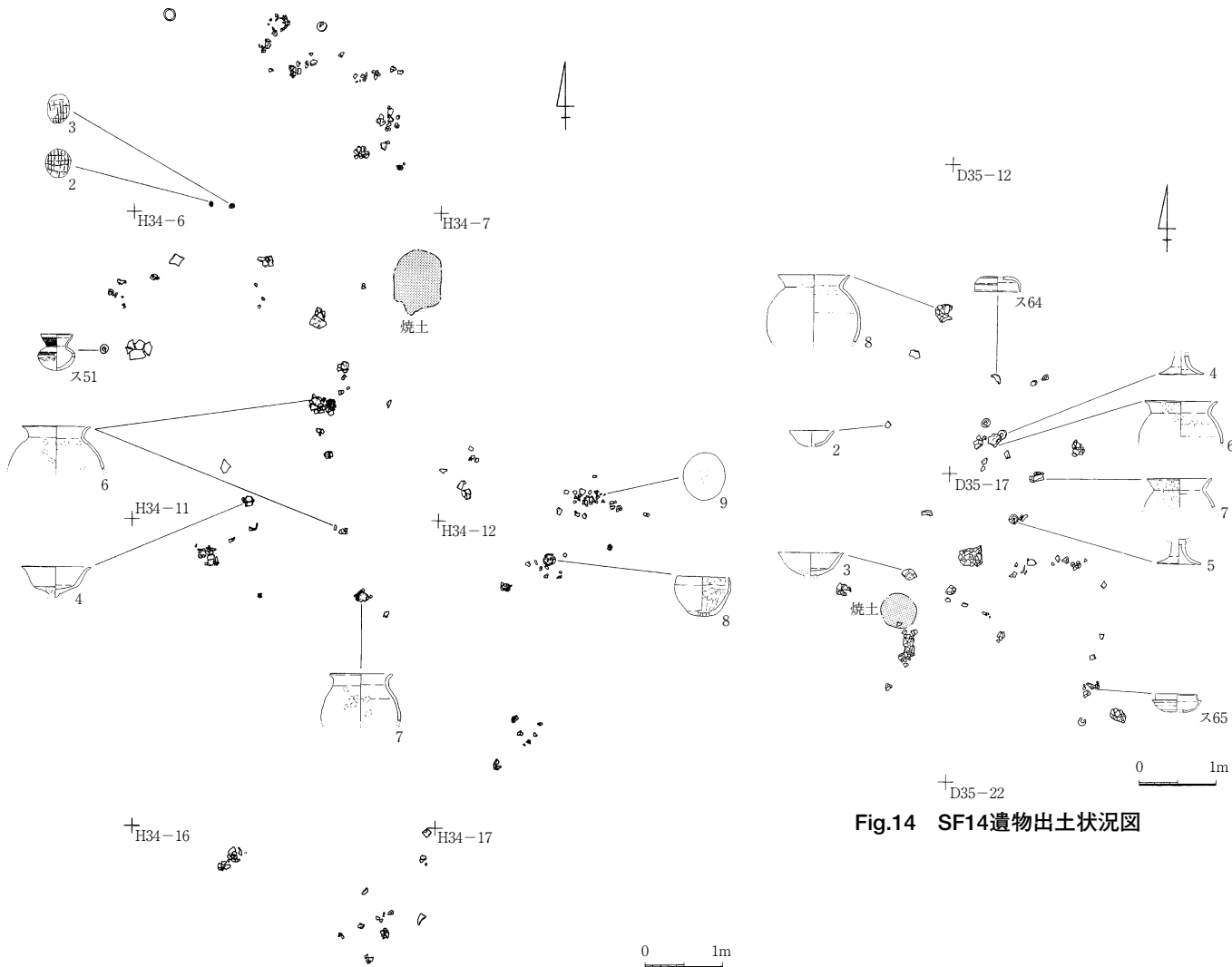


Fig.13 SF12遺物出土状況図

Fig.14 SF14遺物出土状況図

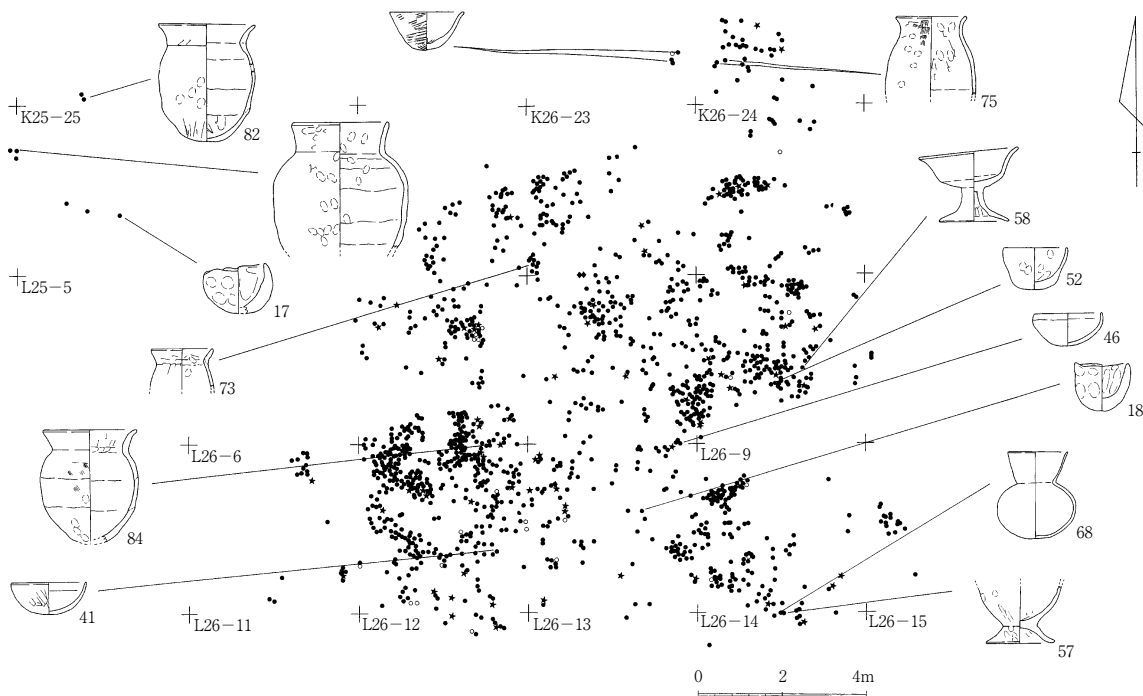


Fig.15 SF21遺物出土状況図

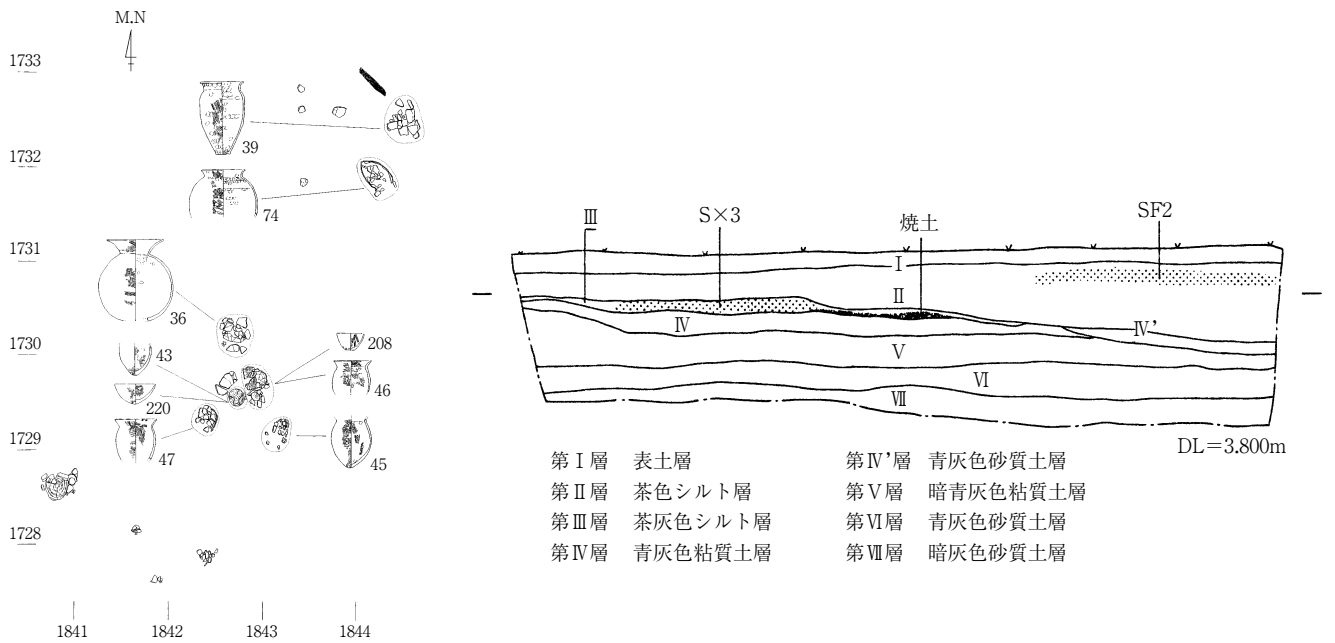


Fig.16 S×3遺物出土状況図

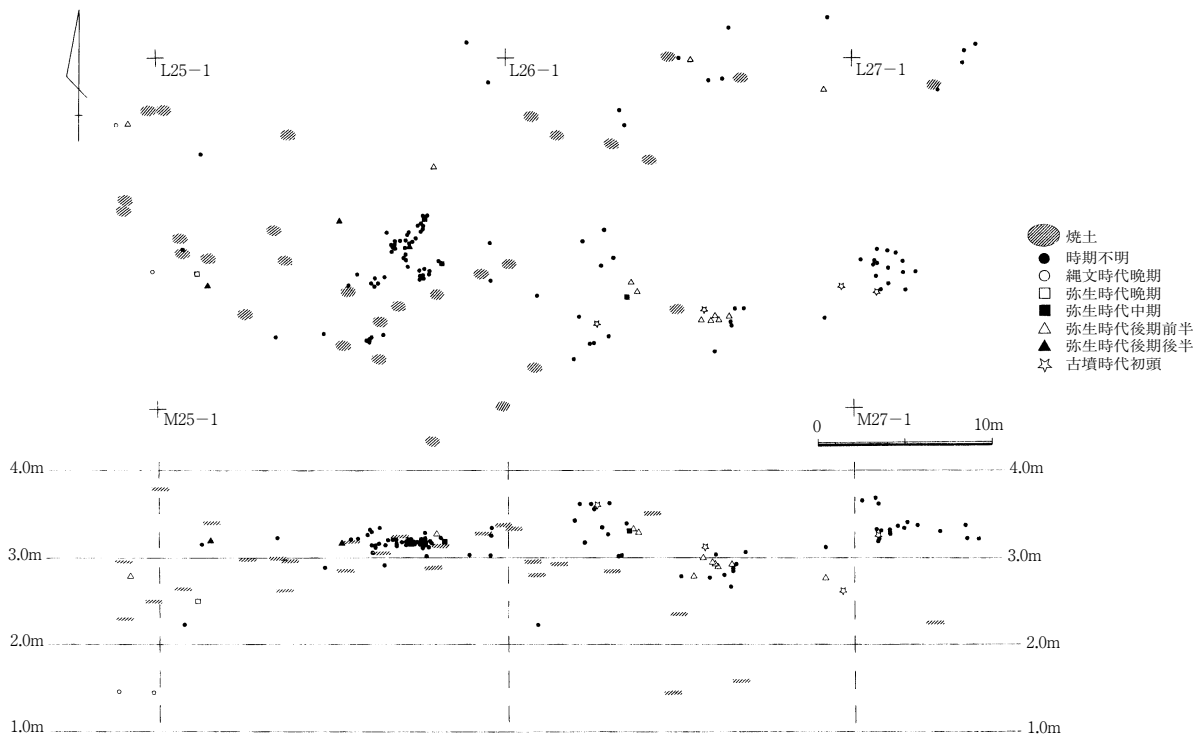


Fig.17 焼土跡群

Tab.1 遺物観察表

図版No	器種	器形	調査年度	土器取り 上げNo.	X座標	Y座標	標高	法量			備考
								口径	器高	底径	
1	弥生土器	甕	98-15NA	51				18.45			
2	弥生土器	甕	96-43NA	79				(16.4)			
3	弥生土器	甕	96-43NA	60							
			96-43NA	61							
4	弥生土器	壺	96-43NA	10							
5	弥生土器	甕	96-43NA	2				(11.9)			
6	弥生土器	甕	98-15NA	51				(13.5)	20.4		
7	弥生土器	甕	96-43NA	3				16.2			
8	石		98-15NA	39	-3863.033	-56630.961	1.784	全長3.1	全幅3.4	全厚2.8	重量41.5g
9	弥生土器	底部	98-15NA	40	-3861.705	-56630.411	1.739			4.0	
10	弥生土器	底部	98-15NA	4	-3861.377	-56632.013	1.735			4.0	
			98-15NA	17	-3861.380	-56631.766	1.831				
11	弥生土器	底部	98-15NA	37	-3863.812	-56630.511	1.816			4.8	
12	弥生土器	底部	96-43NA	1						2.3	
13	弥生土器	底部	96-43NA	9						3.6	
14	弥生土器	底部	98-15NA	20	-3861.653	-56632.207	1.830			4.0	
15	弥生土器	底部	98-15NA	50	-3864.914	-56631.533	1.697			4.4	
16	弥生土器	底部	96-43NA	69						4.0	
17	弥生土器	底部	98-15NA	32	-3861.416	-56632.059	1.769			4.4	
18	弥生土器	底部	98-15NA	36	-3860.011	-56632.111	1.500			(4.0)	
19	弥生土器	底部	98-15NA	47	-3861.023	-56634.978	1.683			(4.8)	
20	弥生土器	底部	96-43NA	19							
			98-15NA	45	-3862.377	-56632.188	1.754			(5.0)	
21	土師質土器	杯	98-15NA	26	-3862.650	-56629.933	1.864	(12.2)	3.2	(6.5)	

写真図版



調査区近景



北壁堆積状況

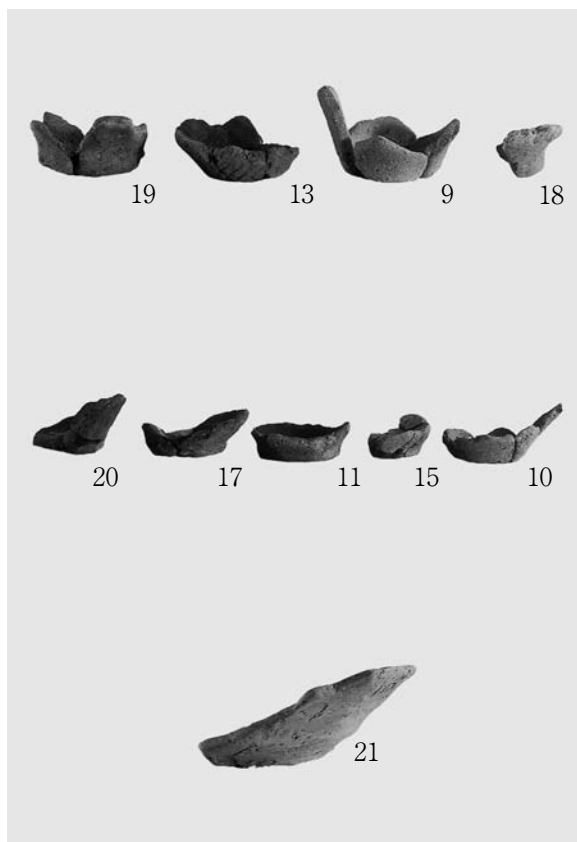
PL.2



遺物出土状況



完掘状況



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あさむらいせき							
書名	浅村遺跡							
副書名	中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	久家隆芳							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 発行年月日 1999年8月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさむらいせき 浅村遺跡	こうちけんなかむらし 高知県中村市 もりさわ 森沢	39207	070168	32° 57′ 38″	132° 53′ 37″	平成10年 7月21日 ～ 平成10年 9月4日	780m ²	中村宿毛道路高規格道路建設工事に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
浅村遺跡	祭祀跡	弥生時代 後期	焼土跡	弥生土器				

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集

浅村遺跡

—中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

1999年8月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社